



# 南極

第9号

平成13年10月18日  
南極倶楽部会報

## 駆け出しの頃

星合孝男

1966年、7次隊夏の1月も末に近く、重いコルゲートを繋いで通路を作る頃になると、基地再開も終わりに近いな、などと考える余裕が出てきた。そんな頃のある夕方、「星合さん、観測をしませんか。」突然、村山隊長が声をかけてくれた。南極観測再開に向けての、長く厳しい国内外における活動に引き続き、昭和基地での昼夜を分たぬ陣頭指揮の合間に、新参の一兵卒にまで気を配るのが隊長かと、頭の下がる思いがした。

お言葉に甘えて、早速、観測用具を準備した。観測用具といっても何のことはない、宮城県の北部農村でドジョウを獲る、竹製の“ドジョウド”である。隊長運転のシャーシーを外したKC20の後部に乗り、「これを吊り下げることのできる所まで。」と言った。水深もわからなければ、方角だって怪しい駆け出し隊員を乗せて、隊長は大陸方向へ車を走らせ、パドルに近づくとゾンデ棒を持って車を飛び降り、一頻り氷をつついては車に戻る。私はただお

ろおると、隊長の動きを目で追うばかりであった。こんなことを二三度繰り返した後、「ここでいい。」という所に着いた。見晴らし岩と岩島の間くらいの中からはなかったかと思う。隊長が突き崩した雪と氷の間からは、うず黒い水面が見えた。不気味で腰が引け、体が固くなった。それでも何とか、ロープの先に“ド”を縛り付け、穴に放り込んだ。そして、“ド”が着底したかどうかを確かめもせず、「隊長、いいです。」と言った。

翌朝、昨日立てた赤旗を目指して、隊長車に身を委ねた。今度はカメラを持った同行者もいた。恐る恐る、幾許かの期待を込めて引き揚げた“ド”には、しかし、何も入っていなかった。“ド”を海底にまで降ろさなかったのが、失敗の原因であった。カメラマンには申し訳ないことであった。

やがて、建設作業を終えた私達夏隊員は「ふじ」に戻った。仕事場である後甲板に出てみると、一分隊(運用科)の黒木章(現・川端)二曹が、にこにここと近寄ってきた。私達海洋関係の仕事は、ウインチ操作をはじめ様々な作

業を、運用科の人達にお願いしてきた。さらに、この人達は物資のヘリへの搭載など、輸送にも関わり、観測隊員との接触の度合いの大きい人達である。私は殆んどの人達と良好な関係を保ち得たと、今でも自負しているが、多くの人の中のこと、親疎があるのは止むを得ない。黒木二曹は親しい友人の一人であった。その上彼は生き物好きでもあった。その彼がにこにこしているのである。何かあるなと思っていると、「悪いけど、留守中に道具を借りて、生き物を獲っちゃった。これ。」といってバケツを差し出した。中を見るとダンゴムシを大きくしたような、海産等脚類が何匹か入っていた。黒木さんの話によると、水深 200 m 位の海底に“ド”を置いたところ、入ってきたとのことであった。早速、「標本にするから。」と、私は漁夫の上前をはねたのであった。このことを教訓に、8次越冬の時には、陸奥湾でモスソガイ漁に使う“ツブカゴ”を海底に沈めて、ウニやヒトデなどを獲ることになるが、この話は改めてすることとした。

1月28日の夜半、見晴らし沖に達した「ふじ」は、2月1日アイスアンカーを抜いて開水面に出た。そして、マラジョージナヤに寄った後、ロア・ボードワンに向け西航した。途中、海洋物理の堀定清さん、化学の塩崎愈さんらは、底生有孔虫の採泥を行った。

時々、この底泥に、コケムシやカイメンが混ざって揚がってきた。これらの動物を私は頂戴することができた。言うまでもなく、採泥器は海上保安庁水路部の備品である。その上海底を曳くのだから、石などにひっかかる。亡失の危険は少なくない。一寸拝借という訳にはいかない。だが、採泥器を見つめる私の顔が、余程羨ましそうだったに違いない。見るに見かねたのであろう。応急長味岡平八さん以下の人達が、太い鉄管を切断し、水路部の採泥器にそっくりな即席採泥器を作ってくれた。生物研究の福嶋博さんと私は、その後思いのままに採泥をすることができた。すでに秋口に入った南極の海風が、心地よく思われたことであった。

8次の越冬では、海氷下海水中の基礎生産の周年変化を追跡することにした。7次の夏、初めて設定された海洋生物定常観測の一項目として行った、「ふじ」航路に沿った表面海水中の植物プランクトン現存量測定の新延長線上の観測である。そのためには、厚さ 150 cm 以上と予想される昭和基地の海氷に穴をあけ、海水を定期的に汲み上げなくてはならない。だが、身の周りには海氷に穴をあけた経験を持ってはいても、それを長い間維持したことのある先達はいなかった。北極やマクマードでは、穴の上に小屋を置き暖房をして穴を維持していると教えられたが、具体的なイメージが一

向に湧いてこない。暗中模索しているうちに、櫓の上にカブースを乗せ、その床に開閉可能な穴を設けては、という事になった。

「カブース櫓の設計なら、細谷さんに頼むといい。」と言いながら、村山さんは幹旋の労をとってくれた。「ふじ」での航海を共にした気安さも手伝って、この雪上車の神様に、恐れ気もなく幾つかの勝手なお願いをした。この電動ウインチを載せたい、とか、電源用として発動発電機が欲しいとかであった。極点旅行用のKD60の改造に忙しい中、細谷昌之さんは私の希望を精一ぱい加味した設計図を書いてくれた。

8次の夏、食堂棟、新観測棟、作業棟、放球棟、管制棟の建設と忙しかった。ヘリを利用しての沿岸露岩地帯での調査なども始まり、再開日本南極地域観測隊の活動は、順調に拡大しているかに思えた。歩み板を垂木の上に張った“松の廊下”を食堂の北側に付け、その東端出入り口に引き戸を作る頃になると、さしもの建設作業も終息を思わせる雰囲気になった。しかし、私のカブース櫓について言えば、櫓もカブースのパネルも、飯場棟の前の斜面に運ばれたままになっていた。さてどうしたものかと、腕をこまねいていると、たまたま通りかかった隊長付・川口貞男さんが、これもまた偶々通りかかった森田博正棟梁に声をかけてく

れた。「これ組立ててやってくれないかな。」と。そして、床が張られ、ウインチが置かれ、ホンダの1KVA発動機が入られ、青色のカブース櫓は一日足らずで出来上がった。

越冬中の調査地点の一つとして、アンテナ島とネスオイヤの間の、北の瀬戸を選んでいた。居住区からも近く、いよいよとなれば歩いて通えるところからである。おかげで、1967年3月12日から68年1月29日まで、1週1回の割合で通うことができた。しかし、この地点は陸地に囲まれている上に、アンテナ島に近過ぎ、浅い。比較のために、オープンで深い調査点欲しかった。そこで、基地から良く見えるオングル海峡の「ふじ」接岸点付近に穴をあけ、カブースの床の穴が一致するように、雪上車でそろそろと引いて乗せた。こちらの調査は4月4日から12月16日まで、半月に一度ではあったが、100m深近くまでの採水ができた。北の瀬戸では夏12月から1月にかけて、植物プランクトンが大量に増えたのに対し、オングル海峡での増加はあまり目立たなかった。北の瀬戸と見晴らし岩、決して遠くはない。しかも海水は一続きである。にもかかわらず、植物プランクトン量の分布に大きな差の生ずることに、大いに興味をそそられた。8次越冬観測の結果には水温データを欠くなどの欠陥があり、冷静に見ればさ

さやかなものであったが、私個人としては結構納得できるものであった。

先にも書いたように準備段階に始まり、現地を踏んでからも、多くの人々の協力、支援を得た。中でも鳥居隊長の観測に対する理解に依るところ、まことに大であった。その一つに、雪上車を専用させて戴いたことがある。

調査地点は基地のすぐ近くであったが、穴の維持に使う道具、採集器などはもちろん、採水した 100 kg 近い海水も運ばなければならない。車を使えばより能率的であること、言うまでもない。汲んだ水はなるべく早く基地へ持ち帰り、所定の方法で分析しなければならない。氷上での作業時間が短いことに越したことはない。越冬の初期、まず隊長の外出許可を得、次いで機械の石渡真平さんに話して、適当な雪上車を借り受ける。機材を積んで出発する。という手順を踏んでいた。4月に入り調査地点が2ヶ所になると、当然、外出許可申請が頻繁になった。海氷も厚く安全になり、当人も海氷上の行動に馴れたようだと、隊長は判断したのであろう、「星合さん、あなたこれからは、隊全体の必要がない時には、いつでもKD20の6号車を使っていいですよ。」と言い、会報の席上でもそう発言した。

計画した時に、計画の通りに行動できるということは、野外調査に従事す

る者にとって、何よりも有難いことである。能率が良いとともに、時間的な自由がもたらす精神的な解放感は、何物にも替え難かった。朝食前に機材を積み込み、エンジンをかける。エンジンが止らないようスロットルを調整し、そのまま食堂に向う。食事をすませて出発する。充分暖まった車の出しはスムーズであった。次第に6号車と私との間に血が通ってきたように思えてきた。誰かが乗ると、テンパーの触感が微妙に変わっていると、感ずるまでになった。

氷状が悪くならないうちの12月中旬、オングル海峡のカブス橋を基地に撤収した。1968年1月末には総ての野外作業を終え、2月1日に「ふじ」に帰った。基地を離れる時、飯場棟の前のモータープールで、ひそかに6号車のボンネット、座席、足廻りに、ワンカップを注ぎ別れを惜しんだ。

(7次夏・海洋生物、8次冬・生物)

### 今は亡き、一昔の前の仲間を偲んで 村山雅美

3次隊の越冬隊のかたちが見えた頃、清野善兵衛(以下清野又はゼンベイト呼ぶ)と武藤晃(以下武藤又はドクター)とは終戦をラボールの第151海軍航空隊で迎えたあの歌詞通りの「同期の桜」の出会いがあった。ラボールではゼンベイトは151空の気象班で海軍

大尉、ドクターは同じ航空隊の軍医長で軍医少佐、舞台は所謂ラポール航空隊の主役から豪軍の管理下の使役に転落してしまった戦友であったとは、越冬隊の骨格はこれで決まりとなったのである。

大正 10 年 2 月、福島県西会津生まれの清野は福島中学から気象技術官養成所を昭和 17 年卒業し、海軍予備学生となり台湾の東港航空隊に入隊、18 年に任官してラポールの 151 空付を命じられた。〔余計のこと乍ら戦前を伝え残したい向きのご参考迄に：100 位の数字は、1（偵察機）、2&3（戦闘機）、4（水上偵察機）、5（艦上爆撃・攻撃機）、6（母艦機）、7（陸上攻撃機）、8（飛行艇）、9（護衛機）、10（輸送機）、1 位の奇数は常設、偶数は特設航空隊を示した〕

あの有名なラポール航空隊は 252 空のことで、なけなしの航空母艦の戦闘機までもかき集めて編成した、とっておきの虎の子部隊だった。ゼンベいのいた 151 空は偵察航空隊で 2 式艦上偵察機 24 機、陸軍の 100 式司偵をもつ有力部隊であった。とはいえ敵地の気象情報は無に等しく僅かに地上気象のみでの偵察飛行と、252 空の戦闘機を飛ばすのがゼンベいの仕事だった。天気を見る眼の確かさ生来のものながらあの生真面目での苦労が思いやられる。観天望気の妙もラポール仕込みだったのだろうかと思出すの

は 5 次隊のことだ。懸架バネをやられた雪上車は漸くのことで大和山脈迄戻ってきた。偶然、昭和基地に来ていたソ連機に救援を頼んだ。基地の清野は可否スレスレの天候と判断、彼は同乗して飛びたった。地吹雪の中に一瞬視認し得た雪上車をめがけて部品を投下した。爆音は低いが見えない機影、我々は氷原に散乱した部品を拾い集めて荒金は見事に雪上車を修理したのもゼンベいの決断の結果であった。

話は戻り南極観測参加決定となるや仙台气象台から引き抜かれた彼は南極に没頭することになる。私とは不思議な縁で 1 次以来 6 次迄、宗谷の全航海をともし、ふじにも 7、9 次と付き合うことになる。南極点を指呼の間にした時、「ト」連送を送って来たのはゼンベイだった。13 次隊長を最後に気象庁の現場に戻ったが、思いもかけない病魔に侵され昭和 53 年 6 月早世されてしまった。生前疑っていたハムを楽しもうと御宅の廊下続きの離れの交信室とアンテナはそのまま残されているとお嬢様から伺っている。

（注）151 空以下旧海軍に係わる資料は、総て塚崎展生会員、沢野憲二会員の提供。

明治 44 年 4 月、秋田県小坂町に生まれた武藤はスキーの大館中学では 1

年から5年迄級長だったとは驚きだが、東京慈恵会医科大学での前穂高、谷川岳の冬山の山歴を縁に南極へと樋口学長の推薦を取りつけた。昭和12年、慈恵卒業後海軍医科士官となり緒戦を艦隊で戦い、横須賀航空隊を経て筑波航空隊軍医長、18年4月開隊した151航空隊に同年12月、軍医長としてラポールに飛びゼンベィを迎えることになる。防戦に防戦を続けついに飛行機を全て失って19年7月10日に解隊され、南東方面艦隊司令部附となった。あと知恵のお恥ずかしい話だが、よくも椰子の木陰に防空壕ならぬ掩堆壕に頭を隠して、どの面下げて\*艦隊司令部呼ばわりできたものだと、同じ組織の末端のその先にいた者の一人として、恥ずかしい気もなくここに書き留めるのも心苦しい限りである。( \* 海軍は陸上部隊も「入湯上陸」というからアドリブとして許しますか)

それはそれとして、慈恵会医科大学では観音さんと親しまれたあの仏顔のポーカフェイス、ものに動じない風格は自ずと終戦時の航空隊員の士気の維持に貢献したことだろう。特にマラリヤの予防に留意した武藤は爆撃が残した穴、なぎ倒された樹木の空洞に溜まった水を徹底的に消毒して回ったという。

3次について7次越冬隊長を勤めたドクターの酒席は「湯の町エレジー」

が出なければ始まらなかった。極点到達を誰より喜んだ彼に「白夜の氷原月淡く ポールを後に旅がらす」と返電をした頃には、神奈川県リハビリセンター病院長等の要職にあった。ドクターは終生ネイビーブルーの背広に同色のレインコート(海軍の雨衣)で決めていた。あの酒好きが思うことあって禁酒を宣言して回りを驚かせたが、仲間の先生が、切角やめたのにこんなに早く他界するなら、少しずつでも飲んでいたら、ひょっとしたら心筋梗塞にはならなかったかもといわれたのは55年6月のことだった。ゼンベィの後を追いかけて帝国海軍は全滅したようなものである。

(注)武藤晃氏に係わる事柄は、慈恵医大山岳部OB大森薫雄先生及び日本山岳会会報による。清野善兵衛に係わる事項は、福谷博会員による。

大正15年5月、東京は恵比寿で恵比寿ビールに勤めていた家庭に高室功は生まれた。目黒にあった官立逓信官吏講習所を卒業し逓信省にはいり、成績優秀の故に船舶通信班として長崎と銚子にしかない短波局である銚子無線局に配属された。船舶通信局随一の技倆をかわれて電電公社出身の通信隊員第一号として観測隊員になった。第1次隊以来の気象担当久我隊員はトンツォーを聞きながら天気図を画くので神様と呼ばれていたが、高室

は漢字変換・記憶機能を内蔵するばかりか脇で仕事を邪魔する人の相手もでき、気が向けばレシーバーそっちのけでお茶をサービスするなど、あれはバケ化け者だと尊称した。酒と麻雀大好きな静かな教官タイプの一徹者だった。何かと観測の連中とそりが合わない越冬初期の頃、かねて観測の障害になる電波を出すなの学者先生が今度は外国基地とのデータ交換をとせがまれ、その先生の顔を見詰めていたバケ。本件は相談するとして時間の調整を相手局とやっつけよ。だが「泣く子と地頭には勝てぬ」ともいうが、我慢していたハムをガンガンやれるぞとけしかけたものだ。当時は通信士の過労を虞れて基地からの私信は1人月200字の枠も消化できず、内地の発信者は家族、友人、上司など文部省南極本部発行の許可証3枚は登録者に限られ、郵便局、電報局窓口でと、当時は情報時代の最先端を誇っていたのだ。余談ながら、銚子で当直明けの夜食作りの腕前を披露したのは毎夜のチングの小宴である。チングとは海軍用語で、待合 = waiting = チングで、小器用にうどん、そば、飲茶で点心等の安らぎの宴は会員制で、バケ室隣りの基地唯一の二畳の大広間がきまりだった。

帰国後は社員養成機関である東京学園、中央学園の教官として後輩の育成並びに平塚、小田原、横浜電話局の

管理者を歴任し定年退職後、団体生命保険に一時就職。体には自身過剰、医者への注意を全く意にせず、平成7年12月、胃癌の為逝去、69才だった。ご遺族は奥様が相模原市でご健在の様子である。

(注)高室功氏について西部暢一会員の話による。

最後に吉田長憲(以下チョウケンと呼ぶ)は大正7年10月、北九州市若松の生まれ。下関市立高等小学校高等科卒業しエルンストフィッシャー商会に勤務の傍ら大阪英語学校夜間部に学び、西村食料品店に勤務するなど根っから食料に縁があったチョウケンだ。昭和14年1月、現役兵として独立野砲兵第11連隊に入営、17年11月陸軍兵長として満期除隊。同年12月関釜連絡船の料理手を皮切りに、天山丸、興安丸、志賀丸の料理手を経て、25年3月海上保安庁の衣糧員となりやまどり衣糧長、26年6月いすず衣糧長、31年7月宗谷の衣糧長として南極のチョウケンが登場となる。

第1次2次で宗谷のシェフ振りに惚れた私は彼を是非にと昭和基地の料理番を頼んだ。陸軍の兵隊さん上がりながらながい船の経験を越冬食に役立ててくれた。船上食の必要量から見ての越冬食の量・質、献立と飽き、食料の包装などあの大人の風格から程とおい細やかな見識のある人だった。

朝鮮戦争の時、仁川上陸にあたって巡視船やまどりで掃海危険海域まで前路哨戒にあたった昔話になりそうになった時、これから佳境にと乗り出したばかりに俄かに口をつぐんでしまったのも軍極秘を思い出した口も堅い人だった。

越冬終わればまた船乗り稼ぎも十数年、めでたく停年の暁には寿司屋でも開くかと堅い口が緩んだこともあった。希望とおり35年5月から、くさかき、からつ、くさかみ、くろかみ、やはぎの衣糧長、補給長を歴任して、52年4月に退官し、萩市東田町に寿司「一清」を開店した。威勢のいい鉢巻き姿も長くは続かず57年自宅で脳溢血のため逝去され享年64才だった。現在、奥様は病床にあり、ご子息が後をついでおられる。

(注)吉田長憲氏の来歴は野明省三氏及び三田安則会員による。

(1次夏・設営、2次夏・3次冬・副隊長、5次冬・7次夏・9次冬・15次夏・隊長、27次夏・同行)

## 6次隊 - 氷海での紅茶の思い出

練木允雄

東京港日の出棧橋を昭和36年10月30日出港。シンガポールを經由して、ケープタウンを出たのは12月14日。暴風圏を抜けて、19日第一号冰山を確認。船は氷海に入り海は静かに

なった。宗谷の周りの氷、薄い蓮葉氷が少しずつ厚さと大きさをまし、気温も日一日下がり、昭和基地に確実に近づいていることが実感できた。

船の生活は東京港を出てから寄港地を除いて毎日6時の起床に続いて朝別課、朝食、おやつ、昼食、おやつ、夕食、夜食と船内放送があり規則正しく過ぎてゆく。東京港を出て四国沖で天候悪化、隊の荷物と私物の整理、船酔いも手伝って船の生活が落ち着くのに時間がかかった。

最初の仕事は同室(我々は船尾の一番後方内側の四人部屋)の文部省の石川智亮さんがマスターで深瀬さんと私がホステスで“クラブ石川”を開店。クラブのテーマソングは当時流行っていた松尾和子の“再会”(歌詞の「会えなくなって 初めて知った 海より深い恋心 こんなに貴方を 愛しているなんて ああ、ああ!かもめにも 解かりはしない」)。このクラブは帰途、石川さんがケープタウンで下船するまで、ほとんど毎晩のように続き、吉川隊長、原田副隊長、気象庁の久我さん始め、船の人も含めてお客は入れ替わり立ち代り、良く繁盛いたしました。私は酒ウイスキー、氷、水、コップ、つまみ等を準備して、皆さんが飲み終わり話も一段落する頃、紅茶を入れて、その日を終えるのが習慣でした。

氷海を進むと鯨に出遭、皆でカメラ



を向ける、氷で閉ざされて船が動けなくなり、総員甲板への船内放送で全員集合。そして甲板からそれぞれが竹さおを持ち、舷側の氷を外側に押すというまるでシャクルトンのエンチュランス号の気分も味わった。そんな中でも宗谷は着実に昭和基地に向かって航行。時々スクリュウに氷を巻き込んで、船底に無気味な音をたてていた。

そんなある日、夕食後のクラブ石川には、吉川隊長を始め常連さんがいつものように楽しい会話で時を過ごし、終わりの紅茶になった、すると石川さんが、『おい練木、今日の紅茶はいつもより砂糖が多いのではないかと言われた』。しかしヤカンの水量と紅茶の量と砂糖の量はいつもと同じでした。『いつもと同じです』と答え、『そうか』と言われ、その夜はそのまま、おひらきになりましたが、次の晩も似たような会話がありました。

その後の話では、その時の紅茶で隊長はじめ数人がタンクに海水の混入を直感して、翌日水槽を精査し亀裂を発見しその真水タンクは閉鎖。今後の行動には支障が無いとの結論を出し、日本の本部と相談、以降の行動は当初の予定どおりとして決定されたそうだ。

以前にもこのようなトラブルはあったようだ。宗谷は船令が古く、観測船に決まって大改造が行われたが、あちこちの老朽化は防ぎようが無い。そ

の後の船の行動について、隊長や明田船長を含めた幹部の方々、東京本部の方々の心労はいかばかりであったか、40年も前の昔のことだが当時23歳の新人の私には思いも及ばない、人の命を預かるリーダーの責任の重さは、何時の世も同じで、大は最近のアメリカテロ事件のブッシュ大統領、小は厳しい社会情勢で、会社のリストラ、倒産にも似たものがあるのではないかとつくづく考える次第です。

(6次・装備)

## JARE9・通信棟から

増田 博

「第9次隊の思い出」を…の要請に、なにせ33年も経過 殆ど通信棟での耳年増が中心から躊躇。「隊次の一桁はアンモナイト級」と自認していたが、昨秋の秋田・金浦での某教授によれば、その時代は「神代の時代」と表現しているとのこと。「神代の時代」の曖昧な話でも、倶楽部での酒の肴、「トツキ」の役割の足しにでもなればいいか…と思いながら数題。

「ふじ」とお別れして数日後、2月9日夕方(白夜で昼間と同様)「福島隊員の遺体発見」の報に井シヨ内もテンヤワンヤ。隊長から文部省への連絡の命が飛ぶが、定常の銚子との連絡時間帯とはかけ離れており悪戦苦闘(銚子も南極席へ人を配置しているはず

もないが)も成果にならず。数時間後、西部隊員の機転により、短波帯の船舶遭難通信波(8M)に切替え銚子を呼び続けた結果、かすかな信号をキャッチして貰い、通常の連絡波(18M)に切替え、やっとの思いで内地との緊急連絡体制確立が実現。文部省への公電、ご家族への連絡、ふじとの連絡、ゆかりの鳥居隊諸先生(ふじ艦内)との連絡 etc 通信棟も戦場並みに。内地との時差からして、文部省、京都?のご家族も10日早朝から「7年半後の発見」に大騒ぎになったのであろう。

ご家族の了解のもと、物資を外洋の「ふじ」から空輸し、発見された西オングルの現地で茶毘にふされた。紳さんの遺骨が、遭難当時の仲間であった吉田先生に背負われ徒歩にて西オングルから基地に帰還し、隊長公室に安置されたのは10日の夕方だったと思う。

関係連絡、報道記事などの処理、ルーチン業務も一段落し、とりあえず就寝したが、深夜のモーション基地との連絡のため起き上がった時には、通信室つづきの隊長公室が気になり何度も覗きながら、「吉田先生にとって西オングルから基地までの道のりは?」、「明日はへりでふじへ。当時の仲間に囲まれながら帰国できてよかった」など運命的なものを強烈に感じたものであった。

正に神代の時代の話。内地 NEWS

は、船舶向け放送のカタカナの共同ニュースをモールスで受信し夕食時に読み上げる程度だったが、結構話題提供になったようである。

「府中の3億円事件」では「府中には3億円も持ってる人はいないヨ!」との住民代表の意見があったかと思うと、札幌医大・和田教授による「日本初の生体心臓移植に成功」の報には、2名の昭和基地医師団を中心に喧々譁譁、拒否反応など専門分野までの議論になり大いに盛り上がったが、完全成功とはならなかったことにガッカリ。こんな礎、歴史を積上げて今日の脳死移植に辿り着いているのかも知れない。

基地では各分野の知能が集結しており、「ノーギャラでの解説者」の確保にはこと欠かない状況は同様と思うが、TVなどの映像は考えられない時代であった。

9次隊のメインイベントは「極点旅行」。軟雪地帯を中心に、プラトーまでの旅行隊の苦悩は基地でも十分に感じられた。一転、極点への下りに入ってから快調そのもの、ポール近くになると「C130からプレイボーイ投下あり、読書楽し」などが入電、口笛を吹きながら走っているようにさえ感じられた。少数精鋭?の基地側では「いい気なものは旅行隊!」などと噂しながら、内地からの圧力(外圧?内圧?)に悩まされていた。

「極点到達の第一報を即刻連絡の

こと！」と文部省ほか関係部署からの  
厳命だ。ポール マクマード ク  
ライストチャーチ ワシントン  
赤坂という米軍ルートより速く文部  
省に…という意味であろう。旅行隊  
との連絡は十分確保できるが、昭和  
銚子が問題だ。「お天道様（電離  
層）まかせ！」である。銚子無線電報  
局に無理をお願いし、12月16日から  
24時間体制とし、昭和側の手空き時  
間に随時連絡の可否のテストを繰返  
し実施。到達見込時刻頃はあまり調子  
のいい時間帯とは言えない、旅行隊か  
ら直接 銚子 をテストするも不可、  
の状況だ。最悪も想定、「前もって、  
時間などを虫食いにした予定原稿  
を！」と依頼するも、隊長ガンとして  
首を縦に振らずで、自信のないまま本  
番を迎えた。

12月19日。ポール手前4kmから  
旅行隊との交信を開始。日本時間の午  
前11時に「極点到達」のGOサイン  
が出され、公電を受信 銚子との交  
信となったが、昭和からの電波を銚子  
にキャッチして貰えるまでの1時間  
は、神にも祈る心境であった。かすか  
な信号を辛抱強く拾ってくれた銚子  
無線局のお陰で、「極点到達」の報が  
午後1時のニュースに乗り、前述ルー  
トより1時間強速かったことで何と  
か義務を果たせることができたのは  
幸運だった。

会報5号で大久保先生評があった

が、公電と高木記者のプール原稿の送  
信に成功したものの、この時間帯では  
同記者の特別原稿までを送信するに  
至らず若干の心残りを感じていたと  
記憶する。されど、当日夜の基地組全  
員での「極点到達祝賀会」では、「ま  
ずまず！」と旨いお酒を味わうこと  
ができたのも事実である。

（9次冬・通信）

### みたび 三度南極へ旅して（第6次）

島崎里司

私の南極行きの三度目は、宗谷の総  
決算の旅だ。昭和基地の閉鎖と南極大  
陸海岸線の一部を航空写真測量する  
ことが主任務であった。

その航空機にセスナ185型が決ま  
り、宗谷は必要な改造工事を行い、乗  
員として吉国・北村両飛行士が任命さ  
れ、航空要員は今まで最大の22名と  
なった。

我々の仕事は、越冬隊員15名の収  
容と、セスナ機を昭和基地まで運び写  
真測量を可能にすることで、そのため  
に必要な訓練を行った。特にS-58に  
よるセスナ胴体の吊り下げは慎重な  
訓練を重ねた。

昭和37年1月3日から氷状調査、  
7日には前進困難となった地点、昭和  
基地から112厘厚さ約2.5米の氷盤か  
ら空輸を始める。

主翼を外したセスナをS-58(201号

機)で里野・谷口両飛行士によって行われた。氷上の指揮は、白浜整備士、フックに掛ける作業は、南極5回のベテラン内山整備士と久保整備員、小生は胴体が完全に吊り下げ状態になるまで、胴体後部を保持することであった。

かくして、船長以下総員が見守る中、南極における飛行機の吊り下げ空輸では、世界初(といわれた)の快挙となったのである。

だが、問題はその後であった。胴体の空輸は完璧であったが、主翼の空輸に落とし穴があった。木製コンテナに入れた主翼が大きく振れ回り、昭和基地への空輸に難渋したのである。これにはベテラン飛行士の目的達成への執念と優れた技量に負うところ大であったと思う。

これが宗谷へ撤収する際に最悪となった。S-58の胴体が損傷する事態となり、基地から約5軒定着氷上に降下、既に防錆運転を終え格納状態の雪上車を整備してもらい、コンテナを収容に走ったが、小西飛行士が橇から振り落とされる事故があったが、幸い大した事態にならず安心する。

宗谷の行動期限などから、船長、航空長が協議の結果、主翼を左右とも半分に切断してS-58(2機)の機体内に收容することとなったが、適当な機材がないので基地にあった金切り鋸とタガネを使い基地にいた航空科総員

で作業した。30時間程しか使用していなかったので残念だが止むを得ない処置だったと思う。

2月8日切断した主翼を201号機の機体内に収め、撤収最終便で昭和基地を離陸した。同乗者に村山隊長、佐々木航空通信士がいた。基地上空を一周、いつの日か必ず再開されるであろうことを念じながら帰途に就く。同乗者はお互いに無口であった。

翌9日、新南露岸の調査を目的に渡辺航空長と小西飛行士によって夕方宗谷を発船した。同乗者は、船長、機関長、航海長と村山第5次越冬隊長、吉川第6次隊長、吉田・藤原隊員の錚々たるメンバーに、私と一番若い田畑整備員である。

新南露岸に着陸中、近くにあった黒い苔が付着している石を見つけ持ち帰る。離陸後しばらく飛行、氷の絶壁が連続しているのが見える雄大というか壮観だ。眼下に飛行機とテントが見えてきた。ソ連基地のようだ。

合図に応じて着陸するとソ連隊員が出迎えてくれ、小西飛行士を残して幹部がテント内に招かれている間、付近を撮影しながら待機。この頃になると薄暗くなってくる21時20分、帰船した。

結局、これが宗谷の南極での最後の飛行となったので、昭和基地を跡にした最後になったのと、ソ連基地を訪問するなど貴重な体験ができて幸運で

あった。

2月16日に南極洋発、帰国の途に就く。順調な航海を続けて昭和37年4月17日東京入港。三度の南極への旅が終るとともに、6回に及ぶ宗谷の南極観測輸送業務も終わったのである。(6次宗谷・航空)

### 黒い雪上車と定年後の私

松里房子

早いもので極地研を定年退職して2年半になる。「憧れの専業主婦」の座は空けたままで、妹からは「奥様ではなくお外様」とからかわれるほど家にじっとしていることがない。

平成2年に定員削減され、出版を切り離すという約束も反古にされて係長1名からなる図書係と出版係になってからは、仕事に喜びを見出せなくなり、新たな生き甲斐を求めて飛び込んだ山岳写真の世界が、定年後の生き甲斐に繋がっている。通信教育で学んでいた書道も定年後は金子鷗亭先生の弟子の永井對雲先生に直接師事し、新たにステンドグラス製作の手ほどきを受け、趣味三昧の生活を楽しんでいる。

そんな私にも、12月には4人目の孫が生まれる。孫のお守などはまっぴらと思っではいるが、時にはお守りに狩り出されることもある。9月の半ばに極地研近くに住む息子の所に行っ

たとき、車大好きな2歳半の孫に雪上車を見せようと散歩のついでに極地研に寄った。玄関ホール奥の雪上車は埃だらけだったが、孫は大喜びで、手が汚れるのもかまわずあちこち触っては、「あれは?」「これは?」と問いかけてくる。飛んだり跳ねたりしながら、雪上車の中で30分ほど過ごし、家に帰ったら早速母親に「雪上車は氷の上を走るんだよ」と報告し、私に「また連れて行ってね」とねだる。

あの雪上車が活躍していた頃は、私の娘もちょうどこの位の年で、仕事と家事・育児を両立させるために大奮闘していたなあと当時のことを思い出した。図書と出版の仕事をかけもちでこなし、忙しかったが、仕事に対する夢も情熱もあり、よい時代だったと思う。

JARE Scientific Reports, Special Issue, No.2 として出すことになった極点旅行レポートが、秩父宮記念学術賞の受賞候補になり、審査に間に合わせるため仕上げが急がれた。昭和46年1月初めから、出来上がった原稿から順次印刷所に渡し、初校・再校と進め、三校は村山隊長始め極点旅行のメンバーが印刷所に出向いて行うというハードスケジュールで、どうにか2月26日の提出締め切りまでに、279ページの極点旅行レポートが出来上がった。まさに突貫作業で、残業だけでは間に合わず、家に持ち帰り夜中ま

で校正の毎日だった。3歳の娘の子守に実家の妹に応援を頼み、急場をしのいだ。3月9日の授賞式には私も招待され、末席を汚した。また、極点旅行隊の皆様から記念にと七宝焼の富士山の絵皿をいただき、今も玄関に飾っている。

昨年12月南極倶楽部の忘年会に初めて出席して、懐かしい9次隊極点旅行のメンバーにもお目にかかることができた。あれだけの難事業を達成したメンバーの強い結束と友情は30年たってもあせることなく、健在だった。

図書館業務は、今は万事コンピューターで処理するようになり、資料収集よりも情報提供が重視されるようになった。タイプを打ち、手作業で仕事をしてきた者には、まさに隔世の感がある。しかし、図書室の仕事としてはコンピューターで仕事をするより、自分の頭と手で仕事をしていた方がやり甲斐があるような気がする。人事面では恵まれなかったが、いい時に働き、いい時に辞めたと思う。

定年後は暇になったろうからと、山岳写真の会「白い峰」の広報のチーフをおおせつかり、年4回の会報の編集・校正を一手に引き受け、毎月のニュースの発行・発送も手伝っている。仲間との交流が楽しく、人の役に立てることが心からうれしい。

(元極地研・図書室)

## 隅垣掌帆のこと

久松武宏

掌帆こと隅垣昭男会員が平成13年3月30日に亡くなった。病名は急性骨髄性白血病、享年70歳であった。

掌帆というのは掌帆長つまりボースンのことである。隅垣掌帆は自分の仕事にプライドを持ち、経験に裏付けられた自信にあふれ、自分のことを“掌帆”と称していた。会員番号71には隅垣掌帆となっているのはその証拠である。

生前、小生のところへ月に1~2回の電話があったが「掌帆です。各部異常なし。」が最初の言葉、決まり文句のようなものであった。

隅垣掌帆との最初の出会いは第12次南極行動の備えて修理中の“ふじ”であった。私が甲板士官、隅垣が掌帆長の時である。当時、小生は20歳代半ば、掌帆も40歳少し前であったろう、鼻っ柱の強い者同士の言い合いがあったが、敵は南極経験者であり、言い合いの中から得ることが多かったことを覚えている。

12月末に氷海に進入したが、氷状は船にとって芳しくなく、1月10日に至り、左舷のプロペラの羽根一枚が氷に接触して折損した。その日から2月10日までピセット状態が続いた。

この間、気分転換を兼ね雪合戦、氷上サッカー、氷上運動会、氷取り(船周辺の氷を手頃な大きさにして手渡

して浴槽に入れ込み風呂をわかす：結構な運動になる）船前方（200～300 m）にあるプレッシャーリッチのゴツゴツした氷を船幅分だけ除去する等を実施した。その時、小生の手足になってくたのが隅垣掌帆である。

中でも思い出に残っているのは、副長が「後方約4 kmにある冰山まで希望者を募って保健行軍（今で言う“歩く会”のはしり？）をやる。ルートを偵察して来い」という。その時、同行してくれたのが会員番号29の大和田整備士と隅垣掌帆である。船からスキーを履き、勇躍出発した。氷上は起伏があり、楽なものではなかったが、暫くして目指す冰山に到着した。冰山の高度はどの位だったか？30 m位あったろうか、その頂上からのスキーは格別であった。3人は冰山スキーを堪能し帰艦した。

この保健行軍は氷が割れ、ビセット状態から開放されたので実現されなかったが、あとで副長曰く「万が一の時は保健行軍参加者を保守要員に残すつもりだった」と。

隅垣掌帆との思いではたくさんあるが、いずれの機会に残したい。

本来ならば、もっと早く投稿すべきであったが、小生少し体調を崩し、今になったことをお詫びする。

隅垣掌帆のご冥福を祈ります。合掌（12次ふじ・艦長付）

## NHK “プロジェクトX” 出演まで（つづき） 高尾一三

密群氷中、宗谷と昭和基地との直線距離は1次で約20 km、3次では約160 km（空輸）である。いかに1次がより大陸に接近できたかがわかる。厚い氷を割る場合、排水量の大きい船のほうが砕氷力が大きいのは当然である。宗谷の公称砕氷能力は1 mである。この1 mという数字は当時の予算と限られた時間から老朽船宗谷の改造が決まりそのデータから「宗谷の出しうる砕氷能力は1 mである」とした、と聞いている。リュツォ・ホルム湾の氷状から決めた数字ではない。

6次まで宗谷が使われ3次以降は2次でビセットされた貴重な体験をへて航空機による輸送に切り替えた。その後の砕氷船建造には宗谷の経験を参考にリュツォ・ホルム湾の氷状にあった砕氷能力と操縦性能をもった新鋭砕氷船「ふじ」、「しらせ」と続く。そして現在も続く日本の南極観測は輝かしい功績を残している。1次の南極観測の輸送の大役をはたした宗谷はその後の砕氷船の建造にも裏方であった。

映像の中で忘れることの出来ないことは“中島みゆき”さんの歌だ。そのエンディング曲の「ヘッドライト・テールライト」は映像が与える感動をさらにもりたててくれる。いい歌であ

る。

3月15日南極倶楽部に出席した時、松本さんからこの“プロジェクトX”の映像についてのご批判のパンフレットを頂いた。

その内容は1回、2回の放映された映像の中で宗谷の改造、行動等の項目について、もう一度再確認して欲しいという内容である。ご家族の方々がそのような疑念をもたれた事にたいしては取材に対する私の説明不足で申し訳なく思っている。(4月15日 記)

4月23日にNHKの西入さんと松本さんから2月20日(後編)に放映された宗谷の映像に少し手を加えた映像が放映されるという電話がはいった。

“プロジェクトX”の放映は終わった。45年ぶりに宗谷関係の資料を出し当時の状況に思いを巡らした。その資料の大部分は茶褐色になり今後の保存に注意が必要である。もう取り出すこともないだろう。そしてその資料の主演である宗谷はいま品川の「船の科学館」の岸壁で静かに停泊している。(終わり)

(1次~3次宗谷・航海)

### 極地本散策

#### 南極チューインガム物語

今年の初め、ロッテは「クールミントガム 2001 セレクション」を期間限

定で販売した。私はそれに気づかなかったが、三上春夫ドクターに教えられ、ひとセットを戴いた。クールミントガム誕生の1960年から2000年までに少しずつ変化した包装デザインの代表的な4点に2001年限定デザインの1点を加えて、5個入りでワンセットになっている。その外箱には『ロッテは1950年代、野菜が不足する南極観測隊用にビタミンC配合のガムを提供した。それがきっかけで南極に注目、1960年に“氷山のように冷たい強力ミント”のクールミントガムが誕生』などと書かれている。

ロッテの社史「ロッテのあゆみ」(1965, 只野研究所社史編集室)には、第3章に「5. 南極探検するロッテのガム」がある。要約すると、『昭和31年6月、西堀副隊長がロッテを訪れ、携行食糧としてのチウインガムの開発を正式に依頼した。船中食、基地食、行動食、非常食に区分して、目的に応じて栄養素、ビタミン類やミネラルなどを添加した。帰国までの1年5カ月間の保存に耐え、零下50度の極寒や2度の赤道通過でも変質しないように注意した。黒、緑、赤、黄の鮮やかな着色によって、道に迷ったときガムを噛みながら歩けば、その噛みかすが捜索に役立つことも想定した』、『10月にガムの贈呈式が上野の学士院会館で盛大に行なわれ、その模様は毎日テレビのニュースで全国に放送された。



日本学術振興会から社長に感謝状が送られた』となる。

社内持回り印の捺された感謝状の写真も掲載されていて、『拜啓 この度は南極地域観測事業の趣旨に御賛成下さいまして 御出捐をいただきまことにありがたく厚く御禮申し上げます これによりまして観測隊もわが国民全体の御後援を後だてとして参加各國と密接な協力のもとに南極大陸の学術的調査に努力しこの困難な仕事を遂行する決心を強めた次第でご座います 何卒この上ながら宜敷御支援いただきますようお願い申し上げます 先はとりあえず書中をもって御禮申述べます 敬具  
昭和 31 年 10 月 9 日 財団法人日本学術振興会南極地域観測後援特別委員会 会長 茅誠司 ロッテチュウインガム株式会社社長 重光武雄殿』がその文面である。肝心の寄贈物品名は空欄に後記されたためか薄くて読みとることができなかった。

南極に持参したチュウインガムが、どのような包装デザインであったかを知る手がかりは得られていない。ご存じの方がいらしたら、ぜひお教え頂きたい。幸い、噛みかすが役立つような搜索活動は起こらなかった。甘いガムはあまり好まれなかったとの評価もあって、それがクールミントガムの誕生につながったようである。

『クールミントガムの包装デザイン

“月のマークにペンギンのいる南極の涼味”は、重光社長ご自身のデザインである。新発売の翌年には、それまでの人気商品「グリーンガム」、「ジュシーミントガム」を超えて売上高トップの座を占め、それを社史発行の昭和 40 年まで維持し続けて、「ペンギンのガム」はチュウインガム全体の代名詞となった』というようなことが「ロッテのあゆみ」の第 2 章に書かれている。

日本南極地域観測隊が南極向けに開発を依頼し、それが国内の新商品開発の引き金となったような事例に関しては、記録を掘り起こしておくのも意義あることかと考えている。

(小野延雄、3 次夏・海洋)

## 会務連絡

秋も深まりました。南極倶楽部会員の皆様には益々ご壮健でお過ごしのことと拝察致します。

倶楽部会員数は、9 月例会で 232 名に達しました。会員登録者の中には「一見の客」「冷やかしの客」の様相を呈する御仁も見受けられますが、村山倶楽部会長が“モットウ”とする「来る者は拒まず、去る者は追わず」の精神で、当会を愛する会員達で更に相互親睦が深まれば幸いに存じます。

8 月・9 月の例会幹事は気象グループ(気象庁)が心憎いまでの気遣いで幹事役を担当して下さいました。10

月・11月の例会幹事は、通信担当グループ(ふじ)が担当する予定です。

12月以降の例会幹事を募集受付中です。

幹事幹旋担当: 鮎川 勝(会員番号-53)

連絡先: 03-3962-2762

e-mail: ayukawa@nipr.ac.jp

219 福井 徹郎

220 澤野 憲二

221 海田 博司

222 草刈 信行

223 木津 暢彦

224 菅谷 重平

225 川村 信吉

226 浦 和明

227 柴尾 智子

228 上窪 哲郎

229 阿保 敏広

230 成田 修

231 山下 順也

232 大中文美

### 編集後記

来月は第43次観測隊が南極へ向けて出発します。旧交を温める機会もドンと多くなるのもこの季節です。ぜひ、南極倶楽部「会報」を肴にして思い出の数々を語って戴きたいと思います。

さて、10月は年に1度の行事として、会員の皆様方全員に、「会報」をお届けすることになっております。しばらく、麹町のレストラン「桃山」から遠ざかっていた方々もこれを機会にまた足を運んでください。

紙面の都合で本号に掲載できなかった原稿は次号(1月)に掲載予定です。

編集連絡先: 神田啓史

03-3962-4761 FAX 03-3962-5743

e-mail: hkanda@nipr.ac.jp

国立極地研究所 〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10

### - 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail